



三社祭の行列では、びんさら舞、神輿、鳶職らとともに芸者衆も浅草の街を練り歩き、花を添える。浅草界限ではこの日に浴衣が解禁される。紗幸さんが身に着けているのも夏の着物だ。

日本の伝統文化に魅せられて

「お座敷」という 宝石箱

長谷川あや●取材・文
三浦康史●写真

日本の伝統芸能を体得し、その美しさとすばらしさを
世界へと伝えたい。そんな思いから、

四〇〇年を超える歴史の中で、外国人として

初めて日本の花柳界の門戸を叩いたオーストラリア人女性がいる。
今、芸者として浅草の花柳界に身を置く彼女の、

「愛してやまない」日本の伝統文化に対する思いとは――。



「芸事が好きで、日本の伝統文化に魅かれていて人なら、芸者になるのに年齢は関係ないですよ」



手提げ袋は紗幸さんの手作り。通常、お座敷のときは部屋には持ち込まず、入り口の前の棚に置いておく。



和装が大好きだとう紗幸さん。「毎日、着物を着ることで、歩き方や立ち居振る舞いも自然と変わってくるんです」

江戸三大祭のひとつ、浅草神社例大祭(三社祭)のスタートを告げる大行列に、花を添えるのが、地元浅草の芸者衆だ。その艶やかな芸者衆の中でもひとときわ目を引く女性がいる。長身で、青い瞳の彼女は、オーストラリア・メルボルン出身の紗幸さん。四〇〇余年の歴史を持つ日本の花柳界で、外国人女性として初めて芸者となった女性である。

紗幸さんが初めて日本の地を踏んだのは、十五歳のとき。交換留学生として、一年間、日本に滞在した。

「楽しかったです！ 交換留学生って、いろいろなところに連れて行ってもらえるでしょう？」

「祭りがあるから彼女を連れて行こう」という感で、日本の素敵なところをたくさん見せてもらいました」

北海道から九州までさまざまな場所を旅し、富士山にも登ったという、この一年間の留学経験がその後の紗幸さんの人生に大きな影響を与えることになった。オーストラリアに戻ってから、「何度も、日本に足を運びました」。オーストラリアの高校を卒業後は、慶應義塾大学に入学し、心理学を専攻。イギリス、オックスフォード大学では社会人類学の博士号を取得した。その後、社会人類学者として、比較文化学をテーマとしたテレビ番組の制作に関わるようになり、芸者を集めた番組に取り組みことに。取材、研究を重ね、芸者という日本独自の文化への関心がより高まる中、紗幸さんは考えた。「芸者の世界は、日本人にとっても遠い存在になりつつあります。だからこそ、作り物ではなく、本当の芸者の世界を収めたドキュメンタリーを作ってみたらおもしろいので

はないか。この美しい世界を映像に残しておきたい、いえ、おくべきではないか」と。

外国人であることと意識したことはない

やがて花柳界に強い大学のOBの紹介で、浅草で、芸者としての修業をスタートする。

「浅草の料亭、瓢庵の女将さんが新しいことに取り組みことに前向きで、何もわからない私を快く受け入れてくださって。日本舞踊、太鼓、お茶などさまざまなレッスンを受けた後、料亭で仲居として働きました。芸者衆が出るお座敷を担当し、料理の順序や出し方、お座敷で芸者としてどう振る舞えばいいかを勉強するんです。置屋のおかあさんから、礼儀作法やしきたりも教えてもらいました」

紗幸さんのような外国人にとっては戸惑うことも多かったはずだ。そう問うと、「花柳界は、日本人にとっても特別な場所。独特のしきたりや文化があり、立ち方、座り方、挨拶の仕方など、何もかもが一般の世界とは異なるんです。もちろん大変ではあったけれど、きっと日本人にとっても同じことだと思いません」。

外国人であることを意識したことはない。

「おかあさんの教育は厳しく、何度も怒られました。それは私の出来が悪いから。外国人だからと特別扱いすることなく、大変な辛抱をして、根気強く教えてくれたおかあさんには心から感謝しています」

芸者名の「紗幸」は「透明で幸せ」の意味から

お披露目のタイミングは、置屋のおかあさんが決定する。

「（お披露目が）決まったときは、ほっとしましたね。料亭で修業を始めるときに半年分のお給料をいただいていたのですが、それも尽き、ちよほど緊張感のある毎日を過ごしていた頃でした（笑）。本当に芸者としてお披露目できるんだらうかと、

不安にかられていたときだったので、本当にうれしかったですね」

お披露目の日程が決まってから当日までは、怒濤の日々だった。芸者名は、置屋のおかあさんから一文字もらうのが通例。紗幸という名前は、「幸

子おかあさんの「幸」と、透明感があり、幸せ」という意味を持つ「紗」の文字を組み合わせた。お披露目の日の前には、芸者名が入った手ぬぐいをつくり、おねえさん——つまり芸者の先輩と挨拶回りを行う。お披露目の日だけに使用する



る、名前入りの下駄も用意しなければならぬ。お披露目にも、独自のしきたりがあるのだ。

「出来たばかりの名前入りの下駄を畳の上に置き、写真を撮ってホームページに掲載したところ、『本当の芸者なら、畳の上に下駄を置かない』とあちこちから非難が。箱から出したばかりの新品だから綺麗なことは綺麗なんですけど、たしかに普通は畳の上の下駄は置きませんからね」

一年目は初めて体験することばかりで、「とにかく毎日が新鮮!」。季節ごとのイベントがさかんな浅草の花柳界では、なおさらだ。

「次に何が起こるかかわからず、すべてが手探り状態。おかあさんやおねえさんに教わりながらなんとか一年、こなしてきた感じです」

花柳界には独自のしきたりや伝統がある。だからこそ、日本文化の粋を凝縮したお座敷はすばらしいものであり、その美しい文化を、世界に、日本の若い人たちに伝えていきたい。それが、紗幸さんの心からの願いだ。

「代表的な日本建築の料亭で、季節ごとの一流の料理や生け花を愛でながら、伝統的な音楽、踊りを楽しむことができる。芸者が身に着けている着物も一流のものばかり。お座敷には、失われつつある日本の文化体験が凝縮しているんです」

日本文化を守りたいという思いから、お座敷の帰路には積極的に人力車を利用している。

「かんざし屋や人力車など、伝統文化が受け継がれるのが、浅草の素敵どころ。店と花柳界がお

互いにサポートしあう関係もこの街の魅力です」

ウェブサイトから芸者を呼べるシステムを確立

初めての外国人芸者として国内外、多くのメディアに登場したのをきっかけに、「花柳界に来る



芸者衆の名刺として使われる千社札。これをお財布の中に入れておくと金運がつくという言い伝えもある。

人が減りつつあるのはとても残念なこと。このすばらしい文化をもっと気楽に、気軽に多くの人に経験してもらいたくて、自身のホームページを立ち上げ、メールで芸者衆を呼ぶことができるシステムを確立した。

十人以上集まれば、料理付き一人二万円です

を呼ぶことができる。最初は、外国人の利用者を想定していたが、「リタイアした方たちの集まりやお茶のお師匠さんとお弟子さんのお座敷など、本当にさまざま。ランチタイムに、奥様方だけで利用なさる方もいます。新しいお客様とお会いできるのは、私自身、とても楽しみなこと。ぜひ気軽にコンタクトしてください」。

ウェブから予約できるシステムと明確な料金設定が時代のニーズとうまく合致したのだろう。それまで花柳界に縁のなかった人々が利用するケースも多いそうだ。

「うれしいことです。『初めてだけど、お座敷でどんな風に振る舞えばいいの?』などと聞かれることもありですが、芸者衆はプロのエンターティナー。初めてのお客様にも慣れているので、緊張せずに身を委ねてください」

芸者、二年目――。円熟味を増し、名実ともに浅草の看板芸者として活躍する紗幸さんだが、まだまだやりたいことはたくさんあるという。芸者として花柳界に身を置きながら、撮りためているドキュメンタリーはいつか必ず公開するつもりだ。でも、今の時点での最大の目標は、「もっともっと勉強して、より一人前の芸者になること。そして、新しい『妹』を迎えることができたからこんなにうれしいことはありません。芸者が好きで、花柳界に興味のある若い方からメールをいただくのが、私、大好きなんですよ」とまぶしように目を細める。日本の花柳界は、まだまだ元気だ。



紗幸 (さゆき)

本名、年齢などは非公表。慶應義塾大学で心理学を学び、オックスフォード大学で博士号を取得。日本舞踊や茶道、会話、化粧と着付けなど芸者としてのトレーニングを経て、2007年12月、「紗幸」の名で正式に芸者デビュー。2009年からは、芸者の活動と並行して、母校・慶應義塾大学で「外国から見た日本の伝統文化」について教鞭をとっている。
<http://www.sayuki.net>